

「復活について」

マルコの福音書 12:18~27

はじめに

前回は、イエシュアのもとに反ローマ主義的思想を持つパリサイ人とヘロデ党の人たちがやって来て質問をしたという出来事でしたが、今回はそのパリサイ人の思想に異議を唱える、つまり反パリサイ主義的立場と言うべきサドカイ人たちがイエシュアのもとにやって来て質問をするという、おもしろい流れとなっています。彼らはサドカイ派と呼ばれる、エルサレムの神殿を中心とする祭司家系に連なる、裕福な上流階級の人々で、パリサイ人や律法学者たちと並び当時のユダヤ人の宗教的(思想的)指導者たちでした。彼らサドカイ人はトーラーと呼ばれるモーセ五書、すなわち創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記のみを聖典、神の御言葉としての聖書として捉えていました。この解釈、考えはトーラーを含むタナフと呼ばれる旧約聖書の39書巻すべてを聖典とするパリサイ人、律法学者たちの考えとは食い違うものであり、両者の間には常に議論、論争が絶えませんでした。特に今回取り上げる、死者の復活、神が死人を生き返らせるという奇蹟については、サドカイ人たちはこれに猛反発していました。なぜならモーセ五書の中にはそのような事実も事例も、神の契約も預言も記されていないと彼らは見ていたからです。しかしそんな彼らの聖書解釈、考えをイエシュアは「聖書も神の力も知らない…大変な思い違い」として、真っ向からこれを否定されます。そんなイエシュアと彼らサドカイ人たちとのやり取りを見ながら、今回も出来事の中に表された、秘められた神のご計画に目をとめてまいりましょう。

1. 復活はない…

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:18 また、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て質問した。

12:19 「先生、モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が死んで妻を後に残し、子を残さなかった場合、その弟が兄嫁を妻にして、兄のために子孫を起さなければならぬ。』

まずサドカイ人たちはイエシュアの前に以下の御言葉を取り上げます。

申命記【新改訳 2017】

25:5 兄弟が一緒に住んでいて、そのうちの一人が死に、彼に息子がいない場合、死んだ者の妻は家族以外のほかの男に嫁いではならない。その夫の兄弟がその女のところに入り、これを妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。

25:6 そして彼女が産む最初の男子が、死んだ兄弟の名を継ぎ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない。

この御言葉は、神がモーセを通して定められた規定、律法の一つですが、復活を否定する彼らサドカイ人がいかにも取り上げそうな箇所です。この規定の目的は「死んだ兄弟の名を継ぎ、その名がイスラエルか

ら消し去られないように」するためのものだということです。しかし、もし神が人を生き返らせる御方であるなら、復活があるというのなら、そんなことをする必要はないし、こんな規定を神が設けられること自体おかしいことではないか、というのが彼らの意見だと思われます。確かにこの部分だけを見て言うのならば、しかも人の行いによって、神に聞き従う生き方をするによって義と認められる、救われるという概念を持って捉えるならばそう思うでしょう。しかし人はその言動や行動によっては神に愛され、受け入れられ、その罪が赦され、救われるということはありません。そもそもこの規定を現代の私たちに当てはめると、逆に様々な問題が生じてきます。では一見規定のように思われるこの御言葉は、どう解釈すれば良いのでしょうか。実はこの御言葉には続きがあるのです。

申命記【新改訳 2017】

25:7 しかし、もしその人が自分の兄弟の妻を妻としたくないなら、その兄弟の妻は、町の門の長老たちのところに行って言わなければならない。「私の夫の兄弟は、自分の兄弟のためにその名をイスラエルのうちに残そうとはせず、夫の兄弟としての義務を私に果たそうとしません。」

25:8 町の長老たちは彼を呼び寄せ、話さなければならない。もし彼が「私は彼女を妻としたくない」と言い張るなら、

25:9 彼の兄弟の妻は、長老たちの目の前で彼に近寄り、その足から履き物を脱がせ、その顔に唾して、彼に答えて言わなければならない。「兄弟の家を建てない男はこのようにされる。」

25:10 彼の名はイスラエルの中で、「履き物を脱がされた者の家」と呼ばれる。

この御言葉は、先の規定に従わなかった者が、どのような恥と罰を受けるかという罰則規定にも見えます。しかし神の定めに従わない者への罰は本来、それがどのようなものであれ、死に値します。事実アダムとエバはたった一つの果実のことで、彼ら自身はもとより、その後続く人類すべてが死ぬ者となりました。ですからこれは罰則規定などではなく、一人のイスラエル人が、死んだ兄弟の妻を受け入れなかったために辱めを受けたという、一種のたとえ「型」だということです。ではそれは一体何を表し、誰を指し示しているのでしょうか。ここで彼は結果的に「イスラエルの中で、履き物を脱がされた者の家」と呼ばれるのですが、この「履き物を脱がされた者」とは本来、恥や罰などではなく、なんと神の御前、聖なる場所に立つことを意味するものなのです。

出エジプト記【新改訳 2017】

3:4 …神は柴の茂みの中から彼に「モーセ、モーセ」と呼びかけられた。彼は「はい、ここにおります」と答えた。

3:5 神は仰せられた。「ここに近づいてはならない。あなたの履き物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である。」

3:6 さらに仰せられた。「わたしはあなたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」

これは預言者モーセが、イスラエルを導く者として神からの召命を受けた時のものです。ちなみに彼の従者であったヨシュアもまたヨシュア記 5:15 で同様の経験をしています。そしてこのモーセ、またヨシュアが、やがて来られるイスラエルの王の王、主の主、メシアとしてのイエシュアを指し示す「型」と考え

るならば、「履き物を脱がされた者」についての規定は、ユダヤ人の「長老たちの目の前で…顔に唾」をかけられ、辱められそして殺された、あのイエシュアの十字架の事実を指し示した御言葉であると考えられるのです。そして「履き物を脱がされた者」が「私は彼女を妻としたいくない」と言って受け入れなかった「兄弟の妻」とは、今回のこのサドカイ人たちに象徴されるような、御言葉を正しく理解しない、受け入れないユダヤ人たちを表していると考えられます。つまり「履き物を脱がされた者」が「兄弟の義務を…果たそうと」しない事の原因、問題点は、実は訴えている側の「兄弟の妻」にあるということなのです。それを裏付けるかのようにサドカイ人たちは、子孫ではなく妻に焦点を当てたもう一つの話の矢継ぎ早に話し始めます。

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:20 さて、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、死んで子孫を残しませんでした。

12:21 次男が兄嫁を妻にしましたが、やはり死んで子孫を残しませんでした。三男も同様でした。

12:22 こうして、七人とも子孫を残しませんでした。最後に、その妻も死にました。

これはサドカイ人たちのたとえ話だと思われれます。つまりイエシュアからのものではないということですから。ではこの記述は目をとめるべきものではない、読んでも読まなくても、どうでもいいものなのでしょうか。聖書の中に、特にイエシュアについての記述の中に、そのような記述はなく、すべてを御言葉として受け止める必要があると私は考えます。ですから結論から言って、ここにはイスラエルの王ダビデの姿が表されていると考えられます。なぜならこのたとえは、以下の出来事との類似性があると思われるからです。

サムエル記 I【新改訳 2017】

16:4 サムエルは【主】がお告げになったとおりにして、ベツレヘムにやって来た…。

16:5 …そして、サムエルはエッサイと彼の息子たちを聖別し、彼らを祝宴に招いた。

16:6 彼らが来たとき、サムエルはエリアブを見て、「きつと、【主】の前にいるこの者が、主に油を注がれる者だ」と思った。

16:7 【主】はサムエルに言われた。「彼の容貌や背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」

16:8 エッサイはアビナダブを呼んで、サムエルの前に進ませた。サムエルは「この者も【主】は選んでおられない」と言った。

16:9 エッサイはシャンマを進ませたが、サムエルは「この者も【主】は選んでおられない」と言った。

16:10 エッサイは七人の息子をサムエルの前に進ませたが、サムエルはエッサイに言った。「【主】はこの者たちを選んでおられない。」

16:11 サムエルはエッサイに言った。「子どもたちはこれで全部ですか。」エッサイは言った。「まだ末の子が残っています…。」

16:12 エッサイは人を遣わして、彼を連れて来させた。彼は血色が良く、目が美しく、姿も立派だった。

【主】は言われた。「さあ、彼に油を注げ。この者がその人だ。」

16:13 サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油を注いだ。【主】の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。

このように、ダビデの家にも彼のほかに「**七人の息子**」すなわち「**七人の兄弟**」がいたことが記されています。そして神はこの七人を「**わたしは彼を退けている**」と言われました。この様子がサドカイ人たちのたとえにある「**七人の兄弟**」たちが子孫を残さず死んでいった様子と見事につながるのです。つまりサドカイ人たちのたとえには、「**七人の兄弟**」を持つ人であるダビデとその妻の姿が表されているということです。その妻とは先ほどの話の流れから、ダビデ王の民であるイスラエル、ユダヤ人たちのことであると考えられます。このようにサドカイ人たちのたとえには、ダビデから始まったイスラエル王国が指し示されており、そして「**こうして、七人とも…残しませんでした。最後に、その妻も死にました。**」というたとえには、歴史的事実としてのダビデ王朝としてのイスラエル王国の滅びが表されていると考えられます。今日、国家としてのイスラエル、民族としてのユダヤ人は存在していますが、ダビデの子を王とする、王国としてのイスラエルは滅びたままです。しかしそれらは必ず「**復活**」するのだということを、これを否定するサドカイ人たちに対して、イエシュアは語っていかれます。

2. 復活の際

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:23 復活の際、彼らがよみがえるとき、彼女は彼らのうちのだれの妻になるのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが。」

12:24 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書も神の力も知らないので、そのために思い違いをしているではありませんか。」

12:25 死人の中からよみがえるときには、人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。

ここに「**復活**」の先にある、私たち人の姿について語られています。「**めとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのよう**」とあります。ここで「**めとる、嫁ぐ**」と訳されているヘブル語ナーサー(נָסָא)は本来、神にいけにえを「ささげ(神に)受け入れられる」ということを意味する言葉です(創世記 4:7)。神へのささげもの、いけにえとは本来、神への感謝や喜びを表すためのものではなく、私たちの罪を神に赦していただく、神の御怒りに対するなだめの供え物です。それをする必要がもはやなくなるということなのです。それはすなわち**私たちのすべての罪が赦され、そしてもう二度と罪を犯すことがないようになる**ということです。イエシュアの十字架の死という尊いいけにえによって、私たちのすべての罪の赦し、贖罪は完了しました。あとはイエシュアが復活されたように、私たち自身にもそれが起こる日を待つばかりです。そしてその日、私たちは「**天の御使いたち**」のように変えられ、神のみそば近くに置かれ、この目で神を見るようになるという特権、さらに神と何の誤解もわだかまりもない、完全に通じ合った関係、もはや一片の「**思い違い**」もない状態、それが「**復活の際**」に私たちに与えられるものです。ちなみに「御使い、天使」のことをマルアーク(מַלְאָךְ)というのですが、この言葉は本来、**アブラハムの妻として、アブラハムの家に帰らせる者**、という意味合いがあるのです(創世記 16:7)。アブラハムの妻サラは不妊の女であったため、彼女は女奴隷のハガルを彼のもう一人の妻として与えました。ここに神とイスラエル、そして異邦人の教会の比喻「型」があると考えられ、マルアーク

クはこのつながり、関係を回復させる、立ち返らせる存在、それを指し示す言葉であり、ここに神のご計画が秘められていると考えられます。

また「復活の際」アブラハム、イサク、ヤコブ、またモーセ、ダビデなど、聖書に記された実在の人物たちとも、何千年という時を超えて相見えることになるでしょう。私たちの神は、永遠に「**生きている者の神**です」。イエシュアは、サドカイ人たちがモーセ五書だけを聖典としていることを知って、そこに復活についての言及がないと主張する彼らに対し、あえてその中からの引用をもって復活について語られます。

3. 復活はある

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:26 死人がよみがえることについては、モーセの書にある柴の箇所、神がモーセにどう語られたか、あなたがたは読んだことがないのですか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあります。

12:27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。あなたがたは大変な思い違いをしています。」

「**モーセの書にある柴の箇所**」これは先ほども挙げた、出エジプト記3章に記されたモーセの召命の出来事からの引用です。アブラハムもイサクもヤコブも、とっくの昔に死んでおり、彼らの痕跡さえも残っていません。しかしイエシュアはこの箇所から「**わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である**」という御言葉から、彼らが必ず復活することを宣言されました。そしてご自分がその死から三日目に復活されることによって、「**復活はある**」という事実を完全に立証されました。

またイスラエルの父祖アブラハムもこの復活の信仰を持っていたことがはっきりと記されています。最後にこの箇所を読んで終わりたいと思います。

ヘブル人への手紙【新改訳 2017】

11:17 信仰によって、アブラハムは試みを受けたときにイサクを献げました（創世記 22 章）。約束を受けていた彼が、自分のただひとりの子を献げようとしたのです。

11:18 神はアブラハムに「イサクにあって、あなたの子孫が起こされる」と言われましたが、

11:19 彼は、**神には人を死者の中からよみがえらせることもできると考えました**。それで彼は、比喩的に言えば、イサクを死者の中から取り戻したのです。

私たちもこのアブラハムの信仰に立ちたいと思います。この復活の信仰を持つならば、「人はみな必ず死ぬ」という事実が、恐怖や失望ではなく、希望、待望、切望となるのです。